慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世資本主義起源考（一）
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.2 (1922. 2) ,p.200(50)- 209(59)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220201-0050

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近世資本主義起源考（一）

阿部秀助

一

論者が「近世資本主義と地代説」(一)と題してゾムバルト教授の近世資本主義起源説に史的批判を試みたのは今を去る十年前のことで、爾來同教授は其著「近世資本主義に根本的の修正を加ふると共に、ブレンタノ教授も亦た之れが起源説に關して最近、精緻なる研究を公にせらるゝに至つたことは論者をして更に本稿を草せしむるに至つた主要なる動機である。(二)

一、三田學會雜誌第七卷第三號頁八七——一二六

二、(a)ゾムバルト教授が千九百十九年を以て公にした近世資本主義論の最新版(三版)に於ける卷頭には次の如き言がある。

Dass die zweite Auflage des Buches „Der Moderne Kapitalismus," von der ich ein halbes Menschen alter nach dem Erscheinen der ersten hiermit zwei Bände vorlege, äusserlich ein völlig neues Werk sei, lehrt ein Blick in das Inhaltsverzeichnis. Von dem früheren Text ist kaum ein Zehntel wieder verwendet, und auch dieser Bruchteil des alten Textes findet sich zumeist in ganze neue Gedankengefüge eingeordnet.

(b)Lujo Brentano, Die Anfänge des modernen Kapitalismus. (Festrede gehalten in der öffentlichen Sitzung der K. Akademie der Wissenschaften am 15. März, 1913)

近世經濟生活の本質を論ずるものゝ多くは之れが特徴を以て資本主義(Kapitalismus)又たは資本主義的生産(Kapitalischc Produktion)に歸せんとするのが今日に於ける一般の傾向である。(三)而して以上の名稱が國民經濟學上に使用せられたのはリヒャルト、バソーが吾人に示す處によれば既に十九世紀の初期即ち千八百五年に公にせられたソデンの國民經濟學(Die National-Oekonomie)中に存すと云ふことであるが、但、其内容は今日、吾人の一般に意味する處とは甚しく異なつてゐるのである。(四)然らば今日意味するが如き意義に於て此語を普及せしめし上に最も力ありしものは果して何人なるやに就きて見るに、此點に於て特に吾人の記憶に價するものが二人ある。即ち之れを前にしてはカール、マルクスで之れを後にしてはウェルネル、ゾムバルトである。而して前者によりて此語が使用せられし場合はともすれば倫理的黨派的色彩を有せしに對して後者は遙かに科學的である。(五)

三、(イ)Wenn man die Frage nach dem Wesen der gegenwärtigen Wirtschaftsverfassung stellt, kann man sicher sein, dass darauf mit dem Stichwort „Kapitalismus" oder „Kapitalistische Produktions-weise" geantwortet wird. Und regelmässig verbindet sich damit zugleich die Vorstellung, der sogenannte Kapitalismus sei ein relativ sehr junges Gebilde, und mit ihm sei etwas ganz Neues und Unerhörtes, vorher noch nicht Dagewesenes in die Welt gekommen, der moderne Kapitalismus und die Wirtschaftsformen, die ihm vorangingen, seien gleichsam als zwei ganz Verschiedene und durch einen tiefen Abgrund getrennte wirtschaftliche Welten anzusehen.

(L. Pohle, Kapitalismus und Sozialismus. s. I.)

(ロ)Was ist das Wesen der Wirtschaft der Gegenwart, die die Kapitalistische genannt wird? Mit andern Worten: Was ist Kapitalismus? Die gegenwärtige Wirtschaft, die wir die kapitalistische nennen, ist wesensgleich mit der de Vergangenheit. Beider Ziel ist das Streben nach grösstmöglichem Gewinn. Beide Methode ist, die einzelnen Massnahmen so zu treffen, dass sie dieses Ziel in möglishst vollkommener Weise erreichen, das heisst so Zweckmässig als möglich zu wirtschaften. Wenn trotz gleichen Zieles die Arbeits prozesse nur im Handel die gleichen geblieben sind, in Industrie und Landwirtschaft aber weitgehende Verschiedenheiten aufweisen, so ist dies in dem Umstande begründet, dass der Handel als reiner Denkakt von äusseren Bedingungen frei ist, während Industrie und Landwirtschaft an den jeweiligen Stand der naturwissenschaftlichen Kenntner gebunden sind. (F. Gerlich, Geschichte und Theorie des Kapitalismus. s. 386-387)

其他ワルターは(Walter, „Über Wesen und Geschichte des Kapitalismus" Soziale Revue, Jahrg. 1, 1901, s. 355)ウェンゼルは(Wenzel, „wahrer Kapitalismus und falsche Kapitalismus" Monatsschrift für christliche Sozi_l-reform, Jahrg. 1892, s. 181)等何れも其見る處大同小異である。

四、(イ)R. Passow, „Kapitalismus" Eine begrifflich-terminolsgische Studie. s. 1-2)

(ロ)フォン、ソデン(Von Soden)は千七百五十四年アンスバハに生れ長じてエルランゲンエーナ、アルトドルフに學び後ち普魯西の官職に就く迄はフランデンブルグ、アレスバハのアンキサンダーに仕へ千七百九十六年バムベルグの附近に退隱せしが其後エルランゲン大學は彼れに博士の稱號を與へ千八百二十四年にはミュンヘンの王立學士會院の會員に選ばれ、晩年にはバイエルンの聯邦議會に席を有せしことありしが千八百三十一年を以て此世を去れり、彼は極めて多方面の學者にして其著八十卷、其中九卷は彼れの傑著たる國民經濟學である、彼れの經濟觀はより多く物的にして、同時に彼れは國民經濟學を以て總て國家を對象とする學問の基礎學たらしめんとしたのである。尚ほ彼れは重商主義の反對者で、殊に輸出入禁止、過酷な關稅を課することを非としたのである。(J. Conrad, Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 3 Auflage, VH B. s. 550) 而して彼れの意味する資本主義的とは要するに Kapitalistisch, wenn ein Überschuss an Genussstoff, ein Vorrat erlangt wird. (V. Soden, Die National-Oekonomie, B. I, s. 148, 150) の點に存するのである。

五、(イ)マルクスの性行に就いては普れく世の知る處なるを以て玆に論ぜずとするも、彼れの資本主義に對する級迫が倫理的價値批判の上に立つや否やは今日に至る迄屢々論ぜらるゝ處であるが、論者はベルンシュタインの左の言を肯定せんとす

るものである。

Niemand wird bestreiten können, dass das Kapital überreich an Wendungen ist, denen ein moralisches Urteil zugrund liegt. Schon die Bezeichung des Lohnverhältniss als eines Ausbentungsverhältnisses unterstellt ein solches; da der Begriff der Ausbentung, wo es sich um Charakterisierung der Beziehungen von Mensch zu Mensch handelt, stets den Makel unberechtigter Aneignung, oder Übervorteilung, einschliesst"(E. Bernstein, zur theorie und Geschichte der Sozialermus, 4 Auf. Teil. I, s. 139)

(b)現時に於ける獨逸經濟學界の名物男であるゾムバルト教授の父は米國流の所謂 Self made man で身を貧困の間に處して遂に大地主となつたのであるが、然かも彼は單一な守錢奴でなくて夙に自由主義的理想を懷抱し最も熱心な社會改良論者であつたのである。而してゾムバルト教授は斯くの如き理想と努力とを有した父によつて千八百六十三年エムルスレーベン（ハルツ）に生れたのである。教授の履歴として吾人の知り得る點は彼が千八百八十二年の頃に伊太利のピサ及獨逸の伯林で法學及び經濟學を修得せしこと、千八百八十八年ブレーメン商業會議所役員となり、次で千八百九十年ブレスラウ大學の助教授となり、千九百六年轉じて伯林高等商業學校の教授となる。更に最近伯林大學教授に榮轉するに至つたのである。而して教授の性行としては、彼は富みし父を有せしの故を以て教育上充分な修養を積むを得たと共に、夙に歡樂の巷に逍遙し、且つ世界の各地を周遊して其間、社會問題に深く興味を感じ自から思想上ではラッサーレ及マルクスに近づくことゝなり、殊に後者は一時彼が思想上の獨占者たる觀を呈したのである。然るに最近彼れは獨逸經濟學界の奇才であつたマックス、ウエバーの影響を受けて人事の現象は深く人心の根柢に求むる必要を味ふに至つたのである。又、彼は其性格に於て直情邁行の人で、自己の學問上に於ける進路を妨ぐるものは、誰人たるを不問、之れを一擊の下に粉碎せずんば止まず、との態度を持したのである。斯くて彼は屢々其恩師シュモラーを論難攻擊したのである。而して現時の獨逸經濟學界の主動力に對する反抗的態度は彼が最大の慾望で、加ふるに彼の血脈を廻る血には殆んど保守的思想の血球なく。猶太民族に通有した社會主義的傾向は深く彼れが精神上に繙り。斯くて彼はハインリッヒ、ブラウンの社會文庫の如きは數年間に亘つてゾムバルトと交り、殊にハインリッヒ、ブラウン其他社會民主黨の名士ト自身の獨占物たる觀を呈したのである、而して彼が新しきを求めんとする努力主義の上に立つて居ることは常に大學の學生に向つて人一日も進歩の念なからざる可からずとの福音を傳ふる點から見ても、亦た其の書中に常に Ich nenne dies so und so, 或は sollte heissen so und so の語を繰り返せるを見ても彼の意向を察するを得るのである。況んや彼は眼前只銖利の問題を取扱ふ一學究でなくて、寧ろ一個の藝文の士である。即ち此點に於て彼れに及ぶ者は僅かにクナップ及ブユロヤー位のものである。彼に與へたゾラ及イブセンの感化はマルクスと殆んど異ることなく、彼がブレスラウにありし際には獨逸文壇の覇將であつたゲルハルト、ハウプ

トマリンと交情最も密であつたと云ふことである。而して彼の近世資本主義論は彼自からの多方面な思索の結果で如何に彼が一黨一派の上に其見地を求めずして出來だけ科學的態度を持せんとしたことは近世資本主義論第三版の卷頭語の明かに吾人に示す處である。(G. Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung, und Volkswirtschaft im Deutsch Reich. 27 Jhr. s. 291-300 u. W. Sombart, Der Moderne Kapitalismus, 3 Auflage, I. B. s. XV)

II

輓近に於ける獨逸經濟學の病とする處は。餘りに概念に囚へられ甚しきは之れが奴隷たらんとせし點である。換言すれば概念の固定性を以て實在の流動性を再構成せんとするの餘りに甚しかりしことである。そも概念とは本來事物の符號又たは象徴的代用物で、其現す處は對象と之れに類似の對象との比較即ち共通なる點に過ぎないのである。故に之れを一面より見る時は概念を如何に排列結合するも其得る處は只だ對象の皮想的改造に過ぎないのである。ベルグソンの所謂「數多の象徴的表現によつて事物の具體的統一を分離せしめんとする點に於て、單純なる概念は不都合なるのみならず、又、哲學上に數多の學派を生じ、是等の學派は各次概念の玩具によつて絶ゆるなき遊戯を繼續せり」(一)との言は移して獨逸經濟學界に於ける一部の弱點を指摘せるものと云ふを得可く、例者、此學の根本概念なる「財」に就きて見るもフォン、フィリッポウッチの如きは吾人々類の勞力(肉體的精神的)は經濟上の財にあらずと聲言せるに反してフォン、ウザーとベーム、バヱルクの二人は人類の勞力も亦た經濟上の財たり得ることを主張して居るのである。(二)而して以上の根本概念と同じく今、尚ほ經濟學上に於ける論爭の問題と化せるものは資本主義の概念である。彼のシェンベルヒの政治經濟學參考書(第四版)の如きコンラットの國家學辭書(第三版)の如き別に此名稱に就いて何等の條項を設けざるものは姑らく之れを措くも、然かもシュモラーの如きエーレンベルヒの如き、其他リーフマーン、ハルムス等何れも此概念の構成を否定して居るのである。即ちシュモラー教授はゾムバルトの近世資本主義論を批評せし中に「全著が捧げた資本主義なる根本概念をゾムバルトはマルクス及社會主義的文献に得たのである。而して彼は一般の用語中、最も適當なるものを引用し能しに不拘、總ての色彩に於て煌される此概念は餘りに空漠に餘りに多くの意義を有し且つ不透徹である。か

るが故に、新聞紙上の論爭のみに存し此方面より其姿を沒することなかる可きも、然かも資本主義なる概念が科學上に於て大なる任務を果し能ふやは余に於て疑問である」(三)と論じリヒャルト、エーレンベルヒは資本主義なる名稱を排する爲め次の如く論じて居るのである。即ち「世の總ては資本主義を口にして居るが此場合に於て彼等の有する處は富める資本家によつて缺乏を感ぜる勞働者の搾取、殘忍な勢力發展に關した不透徹な觀念である。斯くの如き不透徹な社會主義的思索或は表現方法は大なる影響を及ぼして居るのであるが、然し科學的には此表現は殆んど了解せられざると共に否定せらるゝのである」(四)と、其他、リーフマーンは近著國民經濟原論に於ける「資本主義」の條項の下に「資本主義及資本主義的なる語は今日、社會なる概念と同じく經濟學上に於て最も大なる任務を演ずる標語であるが、之れが不透徹な理由よりして極めて不調和のものとせらるゝのである。是等の語は明かに社會主義者によつて齎らされたものであるが、然し又た多くの經濟學者によつて好んで適用せられて居るが、此の概念の事實上の內容は朦朧たるものである」(五)又、バルムス教授は曾つて「吾人は今日、吾人が定義し能はざる總てを卒直に資本主義として表現するを常とするのである」(六)と。要するに以上の諸氏、其他、ワグナー教授等の反對意見を綜合して考察する時は、主として次に擧ぐるが如き理由に歸着するのである。即ち(一)此概念は明白透徹の意義をけること(二)此概念は經濟發展上餘りに資本の意義を重要視し、爲めに資本家は憐む可き勞働者を掠奪するなりとの野蠻的心念を惹起さしむること(三)此概念を定義とすることは方法論上の誤謬に陷ること(四)此概念は現實界に於て何等求むること能はざる空想の產物なりと云ふに存するのである。

一 "Henri Bergson, Einführing in die Metaphysik. s. 12-10

二 "V. Philipovich, Grundriss der politischen Oekonomie. 8A. Bl. 5. 7. V. Wieser, Ueber den Ursprung und die Hauptgesetze des wirtschaftlichen Wertes. s. 42.

三 "Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft. 27 Jhn. s. 297

四 "Thünen-Archiv. Bl, s. 34ff.

五 "R. Liefmann. Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. Bl. s. 590.

六 "Weltwirtschaftliches Archiv, Bl. s. 33.

（未完）